

短期大学幼児教育科における即興演奏に関する一考察 II — 伴奏付けの指導方法 —

A Study of Improvisation in the Department of Childhood Education at a Junior College II — Teaching Method of Accompaniment —

(2004年3月31日受理)

松井みさ

Misa Matsui

Key words : 伴奏付け, 即興演奏, バイエルピアノ教則本

要 旨

保育者にとって、保育の中で、ピアノなどの鍵盤楽器を使用する機会は大変多い。しかし鍵盤楽器未習熟者にとって、歌唱指導やイベントの時のBGM等、童謡に伴奏をつけて弾かなければならないことは、大変な負担になる。そして、そのような場合は、既成の楽譜をそのまま弾くのではなく、場面に応じて、即興演奏する力が必要になってくる。そこで、鍵盤楽器初心者に伴奏付けを指導する際の方法の一つとして、代表的なピアノ教則本である「バイエル教則本」と伴奏型の共通点を見つけ出すことにした。これにより、ピアノレッスンの中に伴奏付けの練習を取り入れることが比較的容易になる。そして、鍵盤楽器未習熟の学生は段階的に伴奏付けを学び、身につけることができると考える。

はじめに

筆者は前著「短期大学幼児教育科における即興演奏に関する一考察」において、電子楽器を使ったさまざまな即興演奏の可能性について考えを述べた。しかし、実際学生を指導しているうちに、もっと基本的なところでつまづいている学生が多いことに気がついた。基本的なコードネームは読めるのに、簡単な童謡に即興的に伴奏をつける、いわゆる伴奏付けができない学生が多いことである。

保育の現場ではピアノやキーボードなどの鍵盤楽器を演奏する機会が多くある。それは、遊びの場面かも知れないし、歌唱指導の場面かも知れない。しかし、現場で活躍している保育者のすべてが必ずしも鍵盤楽器に習熟しているとは限らない。本学に入学してくる学生の中にも、鍵盤楽器未経験者が少なからずいるのが現実である。そのような学生に2年間という限られた時間で、どのように実践に応用できる技術を身につけさせるのかは大き

な問題である。とくに、童謡などの曲は、伴奏譜がついていなくて、コードネームのみのこともある。仮に伴奏譜がついていても、学生の演奏技術を超える難易度のものである。そのような状況でも、我々は、学生が自分の演奏技術の中で、より良い伴奏を付け、演奏することができるように指導していかななくてはならない。そこで、本研究では、童謡に段階的に伴奏をつけることによって、鍵盤楽器初心者でも自分の演奏技術に応じた伴奏がつけられるように指導する方法について研究する。

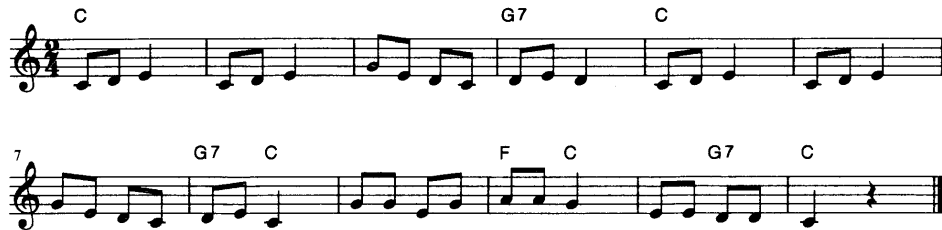
伴奏付けの指導

では、実際に鍵盤楽器未習熟者にどのように伴奏付けを指導していけばよいのか、童謡「チューリップ」を例に取り、考察してみる。

まず、「チューリップ」の旋律楽譜、及び一般的なコードネームを掲載する。【図1】一般的に、この曲は歌唱教材として使用される場合 F-dur で演奏されることが

多いが、本研究では、基本的な伴奏付けの教材として考えるため C-dur に移調した楽譜を掲載し、以下この楽譜をもとに考察するものとする。

【図1】



次に、コードネームをもとに伴奏を考える。旋律に伴奏をつけるに当たって一番に考えなければならないのは、低音、いわゆるベース音の処理であろう。鍵盤楽器未習熟者にとっては、右手の旋律を弾くことだけでも相当の

負担になるはずである。最初の段階としては、左手は、最低音であるベース音だけを単音で演奏することが望ましい。コードのベース音だけを左手に持っていったのが、【図2】の楽譜である。

【図2】



この左手の形は、「バイエルピアノ教則本」の12番の左手の形と酷似している。「バイエルピアノ教則本」は、鍵盤楽器を学ぶものの多くが入門書として利用しており、本学でもピアノ初心者、授業においてこの教則本で練習をしている。この本を教材として使用することの是非

について今は問わないものとしても、長い年月にわたり、入門書として広められてきた本を、伴奏付けという観点から見直すことは、教材の新たな使用方法として、指導上よい結果をもたらすものとする。12番の楽譜を【図3】に掲載する。

【図3】



「バイエルピアノ教則本」では、低音部記号は、後半54番よりでてくるので、ここでは、まだ左手も高音部記号である。しかし今問題にしているのは、左手の音型であ

るのでこのことは何の問題にもならない。12番という早い段階で、この音型がでてくることから、左手にベース音のみをとるこの伴奏型は、最も簡単で初心者にも弾き

やすい形であるということがわかる。そして、原則として、左手は根音を取っているのので、和音が【図1】のようにコードネームで書かれていても、I、Vなどのように和音記号で書かれていても比較的音が分かりやすい。ただ、ここで問題になるのは、Iの第2転回の処理の仕方である。Iの第2転回は、その後のD諸和音とあわせて、ドミナントの機能を持つ。つまり、例の「チューリップ」で言うと、11小節のCはその次のG7と併せてドミナントとなり、ベース音もg-gとならねばならない。しかし、今問題としている鍵盤楽器初心者にとっては、コードネームや和音記号を覚えることだけでも相当な負

担である。したがって、今の段階では、この点については、詳しくは触れないこととし、段階を追っていく上で、第2転回の説明をしていくことが望ましいと考える。

左手ベース音だけの伴奏に慣れたら、和音の原型になる重音の伴奏を試みる。鍵盤楽器初心者は、親指と小指で同時に鍵盤を弾くことは比較的楽にできる様子だが、そこに3個目の音を弾く中指や人指し指が加わると、全部の音が濁ったり、逆に音がでなかったりする傾向がある。そこで、まず2音だけの重音で伴奏をつけるようにする。この方法で「チューリップ」の左手をつけるようになる。【図4】

【図4】

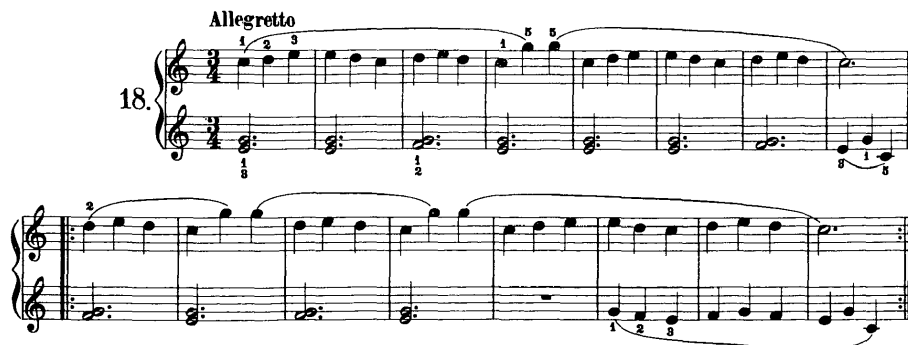


【図2】で示したベース音だけの伴奏型では、基本的に根音のみを取ればよかったが、重音になると転回型のことを考えなくてはならなくなる。これは左手の移動を最小限にして弾き間違いを防ぐため、また伴奏音域を一定にして、聞いたときの違和感を軽減するためにも必要なことである。具体的には、Fのコードでは第2転回型を、G7のコードでは第1転回型を取っている。また、Cのコードの場合、根音と第5音を取ることで、和音の

長調、短調を決定づける第3音を省略した形となってしまう。これは、必ずしも好ましい形とはいえないが、より弾きやすい伴奏型を工夫する、ということを最優先として、現段階では止むを得ないと考える。

さて、「バイエルピアノ教則本」でこの伴奏型に似た形を考えた場合、一番近いのは18番である。楽譜をここに掲載する。【図5】

【図5】



「バイエルピアノ教則本」では、3度音程、2度音程を中心とした伴奏にしているが、これは、この教則本が幼児を対象としているため、幼児の手の大きさを考えた場合、5度、6度音程では手が届かないことがあると考えたためであろう。また、「バイエルピアノ教則本」では、この後しばらくは、重音での伴奏型はでてこない。次に重音の伴奏型が出てくるのは66番からの《重音の練習》という章である。バイエルは各指の独立性に重点をおい

てこの教則本を書いたのであろうと考えられる。今回、伴奏付けという視点から考えると、和音の構成を無視して指導することは不可能なので、重音での伴奏を中心に考えることとする。

重音での伴奏付けに慣れたら、いよいよ3和音での伴奏にはいる。これによってようやく和音本来の形で伴奏をつけることができる。

まず、和音を3音とも鳴らす形を考える。【図6】

【図6】

Figure 6 shows a piano accompaniment exercise in 4/4 time. The right hand plays a simple melody of eighth notes. The left hand plays chords. The first system has chords C, G7, and C. The second system has chords G7, C, F, C, G7, and C. The F chord is a triad (F, A, C).

これは、【図4】で示した左手の2音の間に、残りの音が入って3音になる、という形を取っている。また、G7では第5音省略形を用いている。これによって和音での伴奏づけができたと言える。しかし、今の段階では、ただ、和音をそのままのばして弾いているに過ぎない。伴奏にも、リズムが必要である。そこで、分散和音での

伴奏型を考えることにする。これによって、伴奏にも動きが出て、より音楽が生き生きと表現される事になる。

【図4】での形を応用した分散和音形【図7】と、【図6】での3和音の形を応用した分散和音形【図8】を掲載する。

【図7】

Figure 7 shows a piano accompaniment exercise in 4/4 time. The right hand plays a simple melody of eighth notes. The left hand plays chords. The first system has chords C, G7, and C. The second system has chords G7, C, F, C, G7, and C. The F chord is a triad (F, A, C).

【図8】



学生によっては3和音の練習をする前に、【図7】の分散和音形に入った方がスムーズに弾ける場合もあるだろう。個々の学生の能力、個性によって、適宜ふさわしい指導をすることが必要である。そして、ある程度分散和音に慣れたら、音価を細かくしていくことも必要であろう。16分音符を用いた分散和音型の例を次に掲載する。

【図9】

【図9】



分散和音の形に慣れたら、単音だけの音型ではなく重音を組み合わせるなど応用していく。それによって、新たに様々な伴奏型をつくり出すことができる。【図10-1】はバイエル72番の伴奏型、【図10-2】は88番の伴奏型、【図10-3】は102番後半の伴奏型を応用している。このように、教則本で、新しい伴奏型ができれば、その伴奏型で童謡の練習をするようにする。これをくり返す事によって、どんどん難しい伴奏型で演奏できるようになり、たくさんの種類の伴奏型を身につける事ができる。

【図10-1】



【図10-2】



【図10-3】



旋律と伴奏との関係

ここまでの考察で、鍵盤楽器未習熟者でも、段階的に学ぶことにより、簡単な伴奏を即興的につけることは可能になった。しかし、ある程度、鍵盤楽器を弾けることができる学生の場合、旋律にあった伴奏をつけるように指導することは大切なことである。「チューリップ」などのように4分音符、8分音符を中心とした単純なリズムの曲と、「アイアイ」などのようにシンコペーションやその他のいろいろなリズムを多用している曲では、ふさわしい伴奏型というのは全く異なってくる。また同じ曲でも、卒園式の園児入場の際に演奏する場合と、運動会の入場行進の際に演奏する場合では、伴奏型は変わってくるのが当然である。ある程度、いろいろな伴奏型に慣れさせた後は、曲により、また弾く時の状況に応じて、どのような伴奏をつければいいのか、学生自身に考えさせ実践させることが大切である。それに伴って、演奏する際の音域、テンポ等にも注意を払い、どのようにすれば、その場に応じた演奏ができるようになるか考えさせることも必要である。

ま と め

伴奏付けと一口にいてもその内容は多岐にわたる。単に和音を弾くだけではなく、旋律を生かすには、どのように弾けばいいのか、また、弾く時の状況は、歌唱指導か、BGMや効果音としての音楽か、それぞれのケースによって求められる伴奏は変わってくる。大切なのは、上手に演奏することよりも、効果的な演奏をする力を身につけることである。そして、即興演奏としての伴奏付けを鍵盤楽器初心者に指導する場合、ピアノ指導で使っているテキストなどをうまく利用することが有効だと考える。ピアノテクニックの指導と平行して、伴奏付けの指導をすれば、早い段階で、実践に使える技術を身につけることができる。そして、ピアノテキストにそった指導をすることで、平易な伴奏から自然に難しい伴奏に到達することができる。

鍵盤楽器を弾くことが苦手な学生にとっては、童謡に伴奏をつけて弾く、と言うことは苦痛とを感じるかも知れない。しかし、日々の生活の中で、効率的に練習することによって、少しずつでも演奏技術を磨き、合わせて伴奏付けの技術も身につけてもらいたい。今回の考察では、本当に基本的な事のみについて述べたので、調も C-dur、コードネームも C、F、G7 に限定した。実際に学生に指導する際は、調号のついている曲や、たくさんのコードネームについても、対応できるようにしなければならない。より実践的な指導をするために、これらのことについても系統的な指導方法が求められる。今後の課題として模索していきたい。

参考・引用文献

- 大学音楽教育グループ編：改訂 歌唱教材伴奏法 パイエルとチェルニーによる，教育芸術社（1998）
- 森田百合子，山本金雄，山本 敬，秋山 衛 共著：幼児の音楽教育，教育芸術社（2001）
- 全音楽譜出版社出版部編：全訳パイエルピアノ教則本
全音楽譜出版社
- 松井 みさ：短期大学幼児教育科における即興演奏に関する一考察 — 電子楽器を用いた教育の可能性 — 中国学園大学・中国短期大学紀要（2002）